

1. はじめに

中国の新疆ウイグル自治区では、ウイグル語は公用語とされている。しかし、いわゆる中国人である漢人の人口的流入、政治的経済的力の前にウイグル人でも漢語を習得する人が増えている。漢語習得が現実的に進学や就職や仕事に有利だからである。しかし、それはウイグル知識人にとってはウイグル語衰退、ひいてはウイグル文化の危機と映る。

戦前の清朝末期に漢語教育が強制されたとき、かれらは漢語を習うものはコーランを読むことを禁ずる、という強い反発で対処した。現在でも漢人を中心とする中国政府に対する民族的な不満は和らいではない。むしろ、開放経済の下で漢人との不平等な競争を強いられることで不満は強くなっている。現在、漢語学習は小学校から義務となっており、それでも成果が上がらないと漢人の学校に入れる親が増えていく。だが、早期教育でのバイリンガルは困難な面がある。子供にとって二つの言語を覚えることはかなり負担である。

漢人の学校で教育を受けたウイグル人の多くはウイグル語をうまく話せず、家でも漢語を使う。ウイグル人はこのような「民考漢」（漢語で試験を受けた少数民族）を「十四番目の民族」（新疆ではカザフなど十三の民族が公式に認められていた）という。かれらは自分自身を中国人でもありウイグル人でもあるという異種混交の存在であり、双方から疎外されると感じている。漢文化に対する同化を拒否するウイグル人は「十四番目の民族」に対するジョークをよく口にする。「年寄りのウイグル人がバスに乗っていた。その後ろの席にきれいな服を着た二人のウイグルの女性が漢語で話していた。バスが止まったとき、誰かがその女性の足を踏んだ。彼女は“痛い、けがをするじゃないの！”と漢語で叫んだ。それを見て年寄りのウイグル人は言った。“さて十四番目の民族はどのように反抗するかな？たとえ痛いといってもそれは漢人の痛みだろ”」¹

中国は多民族国家といいながら、実際は国民国家による国家統合をめざしている。いまだに現実の世界でも国民国家が単位として動いている。その国家は教育によって一言語を公用語とする。それは国家の中に住む少数民族と矛盾を起こし、言語を政治的な対立の場とする。国家や民族という共同性をうちたてるためには言語は重

要な手段のように見える。言語はそのように強固なものではないのに、政治は言語が共同体にとって不可欠のような幻想をふりまく。このような言語の政治性と本来的な雑種性を視野に入れながらウイグル語と民族的アイデンティティの関係について考えてみたい。

2. 近代ウイグル語の形成

ベネディクト・アンダーソンは、国民意識の基礎を築いたものとして出版資本主義をあげているが、ウイグルの場合、どのようにして国民意識形成に関わったのであろうか。²

① 出版語は聖なる言葉（ヨーロッパではラテン語、ウイグルではアラビア語）

の下位と、口語俗語の上に、交換とコミュニケーションの統一的場を創造した。会話によってはお互いに理解するのが困難なこともあるが、印刷と紙によって、彼らはこの特定の言語の場に数百万の人々が属することを意識するようになる。

② 出版語は言語に新しい固定性を付与した。これ以前、言語は変化しやすいためであったが、印刷本は永続性を持ち、主観的な国民意識にも一つの核を与えた。

③ 出版語は旧来の行政言語とは別の権力の言語を創造した。出版語に近い方言に比べると、遠い方言、出版語を持てなかつた方言は、その社会的地位を失っていた。現代ウイグル語の基礎となった北疆方言は力を得た。

近代ウイグル語の形成は広く中央アジアの動きに関係する。まず、ロシアのムスリム社会で新方式による近代教育が始まったとき、そこで使われる母語とは何語であったのだろうか。それまでロシアのムスリムが講読の授業で使用してきたのは、アラビア語、ペルシャ語、チャガタイ・トルコ語という三つの文章語であった。しかし、これらは生徒が日常的に使用する言葉ではなかった。彼らはトルコ系の諸語を話すとだけしか書かれてないが、これらの人々が容易に共通して理解できる文章語としてオスマン・トルコ語があった。³

一九一八年、タシケントに生まれた文芸サークル「チャガタイ談話会」はウイグル語形成に大きな役割を持つ。この年、トルキスタン自治ソビエト共和国は「トルコ語」をロシア語とともに国家語と定め、初等教育は母語によって行う法令を發布した。談話会はアラビア文字の改革とそれに基づいた新しい正書法の確立という

課題をもっていた。従来のアラビア文字は「トルコ語」の音韻体系を表示するには不適で、普通教育の普及、さらには印刷の効率化にとって大きな障害となっていた。この改革案は現在新疆ウイグル自治区で用いられているウイグル語にきわめて近い。これはトルコ共和国の文字革命にも先行し、この案は一九二七年のラテン文字採用まで続いた。談話会の動きは言語ナショナリズムであり、トルコ語をアラビア語やペルシャ語から解放することを目指していた。しかし、古くからアラビア語などはトルコ語に入っており、トルコ語の純化は無理なことであった。さらに文章語の確立に取り組んだのであるが、その当時、共通トルコ語、タタール語、チャガタイ語の三つの系統が機能していた。これが結果として統一されたわけではないし、ついにトルキスタン人による本格的なトルコ語辞典は編纂されなかった。⁴

さて、現在のウイグル標準語はイリ（グルジャ）の方言が基になっている。⁵ グルジャには遅くとも一九〇七年までにはロシア・ムスリムで始まった新方式の学校が存在していた。⁶ 地理的にも文化的にも新疆の中ではロシアに近いし、トルコ語の新聞や雑誌が出版されるなど開明的な気風に満ちていた。少し後のことになるが東トルキスタン共和国が設立されたのもこのグルジャを中心に行っていた。そのとき『民族報』はウイグル、漢、モンゴル、ロシア、満の五種の文字で、『新疆新聞』はウイグル語で発行され、東トルキスタン共和国の民族主義的な記事が掲載されていた。

十七世紀になって、清朝の新疆支配とともに、北疆と南疆の差異を縮小する条件が整っていたが、一九三〇年代、盛世才は最初、進歩的な政策をとり、少数民族にも自らの言語で教育を受ける機会を与えた。辛亥革命時期の唯一の少数民族の革命新聞、『伊犁（イリ）白話報』が一九一〇年に創刊されている。伊犁地区に居住していた民族のため、漢、ウイグル、モンゴル、満の四種版が発行され、清朝封建独裁反対などを掲げていた。⁷

一方、カシュガルに関しては、まだグルジャで通用している「ウイグル語」とはちがう言語が存在していた。カシュガルのスウェーデン伝道団印刷所は、東トルコ語で印刷された教科書を以前の手書きにかわって一九二一年から発行した。これはスウェーデンの教科書の翻訳であった。その外、アラビア文字による東トルコ語表記の標準化を試みる正書法の手引き、中央アジアの歴史書、東トルコ語の文法書も発行された。この東トルコ語はカシュガルやヤルカンドで話され、新疆北部のトル

コ系住民の言語に依拠した「現代ウイグル語」とは異なるものである。⁸ その当時の紀行文には次のような記述がある。「ケリアに住むマチン族の言語は、東トルキスタンに広まっているトルコ語（いわゆるカシュガリア方言）である。でも通訳の話によると“グルジャ”の住民には通じない言葉が混じっている。マチン族の言語にはオアシスごとの小さな相違があり、カシュガルとアクスの方言、つまりアルドビュル語とはかなり異なっている。」⁹

一九三四年、改革派はカシュガルで『エンギ・ハヤット』（新生活）という新聞を発行した。これはカシュガル文化促進会が発行し、ウイグルの政治、文化、詩、またはトルコや中近東の事情を載せていた。政府によって停止されるまで、二年間にわたる、二千五百部の週間新聞だった。¹⁰ その他の都市でも新聞が発行され、この時期は近代教育も始まり、各地で民族運動も起こり、民族意識の高まりが感じられる時代であった。

ウイグル人自身の国家であった東トルキスタン共和国は一九四四年の政治綱領ではウイグル語の公用語化を定めた。¹¹（しかし、翌年改正され、漢語使用も許可し、多言語的現実を認め、言語ナショナリズムに走ることはなかった）このようにウイグル語による新聞も発行され、近代ウイグル語は形成されていた。しかし、その文字を読める人は少数であった。一九四九年アクスの農村（戸数四五二、人口一七六一人）では、非識字率は九六・五四％であり、クチャの農村（戸数二一三、人口一七七人）では、八八・五三％である。¹²（一九九七年九月の新華通信によれば、新疆ウイグル自治区では非識字率が一九四九年の九〇％から四％になった。自治区には千六百万人が住み、その七六％が農民や牧畜民である。経済成長の面ではおくられている地域にもかかわらず、識字率が改善されたことを、中央政府とユネスコは賞賛している。）新聞購読に関しては戦後各地に読報組が成立して、新聞が到着したら、夜や休息時間を利用して、組長が朗読し、解釈するような状況であった。近代ウイグル語が新疆全体に普及するのは学校教育制度の整備以後のことである。識字率の低さから見ると、知識層以外に民族語としての意識がウイグル語に対してあったかどうかは疑問である。だが、文字としてはコーランの文字も近代ウイグル語の文字も同じであったということは重要である。

3. 多言語的状況

文字はウイグルにとってマドニアート（文化）の中心をなすものであり、文字の歴史は彼らにとって突厥文字までつながる。遊牧民の間で文字がはじめて使用されたのは六世紀後半の突厥の時代である。はじめ彼らはソグド語を公用語としたが、ソグド文字を改良して自らのトルコ語を石碑に刻んだ。これが突厥文字である。これは九世紀半ばまで用いられた。¹³ 次にタリム盆地で成立したウイグル王国では回鶻文字が使われていた。この二つは古代ウイグル文字としてウイグル民族のアイデンティティの一部である。古代ウイグル民族がこのタリム盆地に入ってくる前には、楼蘭などオアシス国家が点在し、ソグド語、ホータン語などのイラン語系が、トルファンなどタリム盆地の北部などではアーリア系のトハラ語が話されていた。トハラ語は西ヨーロッパに近い言語だといわれている。トルファンやニヤの遺跡から古文書が発見され、そこには十七種の言語、二十四種の書き方が存在した。ウイグル王国時代の文書に、近所の僧侶に頼んで証文を書いてもらった農民たちの生活風景がある。その僧侶は漢人で、当事者はウイグル人とモンゴル人である。言葉はトルコ系のウイグル語が共通語（リング・フランカ）になっていくのだろうが、その根底には多民族、多言語的状况があった。やがて西方からイスラム化が進んでくる、カラハーン朝の時代にウイグル文字は次第にアラビア文字に変わっていく。タリム盆地西部のトルコ化はカルルク人を中心とするカラハーン朝の進出によるものである。¹⁴

十一世紀後半にマフムド・カシユガリの『トルコ語大辞典』にはカシユガルの城内ではトルコ語が話され、ホータンの住民もアタ（父）をハタ、アナ（母）をハナというなど、なまりがあるにしてもかくトルコ語を用いていた。さらにヤルカンドで発見された土地売買文書はイスラム形式の書式で、アラビア語で書かれているが、証人の文言にはアラビア文字によるトルコ語と、ウイグル文字によるものと二通りがあった。これはアラビア文字化が進展した十二世紀でも、その文字に不得意な人々がいたことを示している。¹⁵

聖なる言葉はウイグルにとって、イスラム改宗とともに古代ウイグル文字を捨てて以来の、アラビア語、つまりコーランの言葉である。これは長いことイスラム学校で教えられ、知識人のあいだではペルシャ語とともに、尊重された言葉である。十一世紀から十二世紀にかけてカシユガルやホータンなど南部ではイスラムの影響で、ウイグル書面語としてアラビア文字を用いていたが、トルファン、ハミなどの

北部ではなお仏教を信仰し、ウイグル文字を使用していた。この結果、北部と南部では書面語が大きな隔たりを持つことになった。¹⁶ 他方、口語のレベルでは、十一世紀終わりには、リング・フランカとしての口語俗語・トルコ語が広まっていた。ソグド人、サカ人、トハラ人といったアリア系定住民が、印欧語系統の言語に変わってトルコ語を話すようになった。それはウイグル人やカルルク人などの移住と定住が要因である。¹⁷ 同時にアラビア文字化も進んでいた。

また、十一世紀以後、トルコ語は「コーラン」の言葉であるアラビア語や文芸用の言葉としてのペルシャ語に比べると、文章語としては使用にたえぬ粗野な言語とみなされてきた。そのためこれを用いて文学作品を表わす事はまれであった。しかし、十五世紀後半ティムール朝ではチャガタイ・トルコ語による詩が現れ、この言語の優秀性を示した。¹⁸

この地域ではバイリンガルは普通のことであり、状況に応じて違う言語が使われていた。このような状況は近代以前には世界のどこにも見られ、言語が制度化され、優勢な言語が国語として強制されることのない多言語状況があった。しかし、ロシア、清などの国家統合が進む中でいやおうなしに、自らのアイデンティティの探求に向かわざる得なくなった。

4. 中国の少数民族言語政策

社会主義国家建設において先行していたソビエトから、直接的に中国が手本とした面も多い。まずソビエトの言語政策の概略を述べておこう。¹⁹

ソビエトでは革命から一九三〇年代までは、民族自決と民族平等の原則から各民族は民族語による教育を保障され、文字のない言語にはラテン文字が与えられた。ロシア文字でさえ封建的であるとしてラテン化の動きさえあった。だが、民族の平等をいえば、連邦制は危うくなるという内部矛盾とともに、第二次世界大戦というナショナリズムを必要とする時代に向かい合って、ロシア語がソ連諸民族の国際語、社会主義革命の言葉とされる。

一九六一年党大会においてフルシチョフは民族接近の方途としてのロシア語という位置づけを行い、子どもをどの言語で教育するかは親の自由であり、ロシア語は各民族の第二の母語であり、諸民族の文化的達成や世界文化を受け入れる手段である、と唱えた。これからロシア語バイリンガルが進められていった。また、文字も

ロシア文字に取り替えられていった。このほうがロシア語習得に便利であり、ロシア語が民族語の中に入りやすくなる。また、バイリンガルの実態はロシア語が最高の言語として高等教育機関、科学、技術、法律、その他の重要な出版物をほぼ独占するものであった。そのプロセスをまとめると、「文字の取り替え↓バイリンガル↓民族語は公用語、教授言語から排除され、生活言語に限定されて、やがて家庭内だけになる↓民族語の消滅」と進んでいった。

中国との類似点をあげると、

①革命当初は民族平等の下、民族語による教育が保障される。

②少数民族の文字が作られ、漢字の廃止を含めて、ラテン文字化が考えられた。

③少数民族の民族意識の盛り上がりに対抗する意味で漢語バイリンガル政策が始まる。

④スターリンは「単一のソビエト人」の下に民族対立を解消しようとしたが、これは「中華民族」とほとんど同じである。

⑤教育の初等段階では民族語教育を保障するが、高等教育は漢語である。科学分野は漢語で出版される。都市に出て、経済や科学などで高度な活動をするなら漢語を習得せよ、農業、牧畜で一生を終わるなら民族語だけでよいという意図が見える。

⑥ソビエトならロシア人、中国なら漢人というように、多数派の支配的民族を全国に、特に少数民族の地域に、政策的な移住を行う。これにより言語的にいえば、漢語が通用する地域が拡大することになり、社会的、経済的な面から民族語が圧迫される。

すでに述べたように一九二〇年代ころ近代ウイグル語は形成されていた。しかし、ウイグル語の母音体系はアラビア文字では表記しにくいことから、ウイグルの知識人はすでにこのときから文字の改革を考えていた。ソビエトに住むウイグル人が一九三〇年から四六年までラテン文字を採用し、それが新疆の一部に導入されたこともあった。戦後一九五六年にソビエトの後押しにより、キリル文字化が決められ、一部の学校では試験的に教えられた。これは大量の教科書を含めたウイグルの書籍がソビエトで印刷され、ウイグルに送られていたからである。しかし、その直後の一九五八年に漢語のピン・インに基づいたウイグル語のラテン文字化が行われた。この急な方針転換は中国とソビエトの関係悪化が原因になっている。ラテン文字化

は中国側の一方的な圧力ではなく、ウイグル側に文字改革の要望があったからである。これが結果としてうまくいかなかったのは、改革が中国主導であったこと、ピン・インの文字の発音は西欧のラテン文字の発音と違うこと、そしてウイグル保守層からの反発である。これは一九八二年にアラビア文字に戻るまでつづけられた。途中で文化大革命による混乱はあったが、ウイグル人の約半数がこのラテン文字によるウイグル語を学習しなければならなかった。

このアラビア文字の再導入はウイグル民族の勝利だと受け取られたが、必ずしもすべてのウイグル人に歓迎されたわけではない。すでにラテン文字で教育を受けた人は多くいたし、また、若い知識人は今のウイグル文字に満足せず、将来の文字改革を期待している。

文字改革というのはナシヨナリズムが伴っているものである。トルコでもウイグルでもそうであった。しかし、トルコではアラビア文字にまつわる宗教的・保守的色彩を払拭して、欧化の方向に向かったのに対し、ウイグルではナシヨナリズムの矛先は中国とソビエトであった。このような非宗教的な大国に対し、守るものはイスラムのアラビア文字であった。ウイグル語には多くのアラビア語、ペルシャ語が入っている。トルコではこれらの要素を排除して純粹化しようとしたが、ウイグルでそれをやろうとすると、ロシア語や中国語の侵入を受けることになる。漢語はウイグル語に入っているが、かなり少数である。

アラビア文字の再導入はウイグルの民族性のためにはよかったかもしれないが、中央アジアのトルコ系諸国とは文字の上で離れてしまい、世代間のギャップを生み出した。 20

5、新疆での漢語使用の概況

現在ウイグル人の中にある程度漢語を自由に操れる人はどのくらいいるのだろうか。自治区の首都であるウルムチの人口（一九九六年）は、一四八万人で、漢人は一〇八万を占め、ウイグル人は十九万人にすぎない。それ以前の一九九三年は一三八万人、漢人は百万人、ウイグル人は十七万人である。このように漢人は都市部で増えている、それは一人子政策のため、自然増というより流入であろう。農村部、特に新疆の南部の農村地帯、カシュガル・ホータン地区では人口四七〇万人（一九九六年、ウイグル人四三〇万人、漢人三十三万）であり、一九九三年は四四

○万人（ウイグル人四一〇万人、漢人二十七万人）であったからウイグル人の増加が目立っている。²¹ ウルムチでは圧倒的に漢人が多いため、生活上では漢語が便利になっている。買物、仕事、会社、役所、学校、出版、新聞、テレビ、ラジオ、などで漢語の占める割合は大きい。

【相手の民族語を使用できる程度】

	村落		都市	
	漢人	ウイグル人	漢人	ウイグル人
話せない (%)	73.6	48.8	64.7	12.2
あいさつ (%)	14.9	16.7	18.9	14.8
日常生活 (%)	11.5	34.4	16.5	73.0
サンプル人数	383人	215人	408人	270人

上記の表は一九八七年、石河子、トルファン、カシュガル、イーニンで行われた調査である。²² 自分がどの程度話せるかという自己評価ではあるが、漢人に比べるとウイグル人の漢語使用はかなり高い。以下で述べるように漢語教育の成果というよりは、生活の必要に迫られて漢語を話せるようになったのであろう。

一九九二―九三年の学生の漢語能力調査によると、自治区の各地の学校から三十九校、三八八名の漢族以外の民族が参加して、漢語の読み、書き、会話をテストした。ウルムチ市が十五―二〇%、他の都市五―一〇%、農牧地区二―三%の合格率であった。一九九五年までに中学卒業生の二〇%が「民漢兼通」、つまり、民族語と漢語を双方使えることが目標にあげられている。だが、これは都市部だけで、農牧地区は外されている。²³ 全体として漢語教育の成果が上がっていないのは、漢語教師の数の不足、質が良くないことが原因として考えられている。漢語教師が八千三百名いるが、まだ三千三百名不足である。また、小学、初等中学、高等中学の漢語教師のうち、中等師範、専科、本科の学歴に達した人は各九二%、三五・五%、十六・七%であるが、相当部分が語学科卒業ではない。また、使用している漢語教材が小学用を除いて、一九八五年版と古く、漢語学習テープなど持たない学校が多い、漢語教育研究も遅れている、などの問題点が指摘されている。

現状では、漢語教育が進められているといっても、その基礎になる教育体制自体が整っていない。それは財政的な理由が大きく、校舎など教育のインフラ整備でさえ十分ではない。初等教育では学齢児童の入学率は一九九三年で九七・七%といわれているが、その中の半数が卒業できているかどうかも疑問である。一応、国の政策だからということで受け入れて、漢語教育は表面的には普及しているが、それは必ずしも成果をあげていない。

6・民族語とアイデンティティ

言語はコミュニケーションの道具であると同時に、アイデンティティの基盤ともなる。道具的側面は利便性、実利性が重視されるのに対し、アイデンティティの側面はその象徴性だけでも存在しうる。この両側面が重なり合っていれば、特に問題はないが、これがずれた状況にある言語的少数派はどちらの側面が重要なのか、選択を迫られることになる。

現在、ウイグル人が置かれた状況がまさにこれである。民族的アイデンティティとして民族語を意識するか、それとも単なるコミュニケーションの手段なのだろうか。この二つの側面について考えてみたい。

言語は「個人を、いかなる時点でも現実化されるような、しかも共同行為という内実を有するような起源に結び付ける。諸個人自身の交流や個人間のとりとめもないコミュニケーションを中身とする共同行為は、話し言葉の手段および、いつでも取り替え可能な、書き残され、記録された膨大な量のテキストのすべてを利用して行われる。このような事態はごく最近のことである。古代の帝国やアンシャン・レジームの社会は、言語的には別々の住民の併存に、あるいは支配者と被支配者のあいだおよび宗教的領域と世俗的領域のあいだで相互に相容れない“諸言語”の積み重ねに立脚していた。それゆえ彼らのあいだには、実に翻訳システムが存在していなければならなかった。」²⁴

ウイグルでは前にも述べたように、アラビア語、ペルシャ語の領域と「俗語」の領域が存在し、統一された「国語」が全住民に押し付けられることはなかった。

「民族的な言語意識自体が元来実体のないもので、時代的要請の中で生まれ、いわば手段にすぎない。すなわち競合しあうエスニックな集団すなわち民族としての帰属意識が生まれるまで、当のヨーロッパにおいてさえ人々は言語を意識はしな

った。」 25

おなじように、バリバールは言語共同体がエスニシティを創出するのに十分ではないという。何人も自分の「母語」を選べないとはいえ、複数の言語を身につけ、別の種類の言説や言語転換の担い手になる事は常に可能である。言語共同体は常に存在してきたという感情を生み出すとはいえ、後続世代を宿命的なものによって拘束しない。個人の深部まで影響を与えるが、その歴史的特性は可変的な諸制度と結びついているにすぎない。また、彼は言語共同体とは「現在の共同体」であるという。過去への深度があるように見せかけてはいるが、未来に向かう次の世代は別の言語を選択できる、もしくは強制される。 26

それゆえ、言語共同体が特定の民族と結びつくには、別の原理が必要なのである。その一つとして、過去への深度を持つ「民族の歴史」がある。前にも述べたように、ウイグルでは突厥文字も回鶻文字も古代ウイグル文字として考えられている。古代ウイグルと現代のウイグル人は別であるという論議もあるが、ここではウイグル側の歴史認識に沿って論を進めよう。それは彼らの民族的アイデンティティ確立のための歴史の創造であるからだ。

カシニガル生まれのトルグン・アルマスは一九九〇年に『ウイグル人』を著したが、あまりにもウイグルの歴史を民族主義的に描いたとして、発禁処分になった。彼はウイグルには六千年の歴史があると主張する。それはロブ・ノールから発見された女性のミイラがカーボン測定によれば六千年前であり、ミイラはウイグルのシンボルとモチーフの服に包まれていた。歴史的な定説はウイグルがトルコ系民族として歴史に現れてから千五百年間しか経ってない、タリム盆地に到達したのは西暦八四〇年ということになっている。トルグンの説が「エジプトのピラミッドを作ったのはアフリカの黒人であるというような、事実に対するイデオロギー的歪曲」 27との批判がでるのも当然かもしれない。このいわゆる「楼蘭の美女」は、漢人がこの地に暮らし始めたころより、かなり以前のものであったという発見は、この地域の政治情勢に影響を及ぼし、政治的文化的な混乱を起こしている面もある。ウイグル人は楼蘭の美女を「わが民族の母」と呼んだ。彼女にささげる歌が作られ、その宣伝ポスターには歌手とともに、彼女の顔が描かれている。彼女は歌の中で「キルラン・グザーリ」（キルランは楼蘭のウイグル名）キルランの美人と呼ばれている。

このような動きを、歴史のイデオロギー的な歪曲と批判するのはたやすい。だが、戦前の日本のような記紀神話の歴史化と同等に扱うのは単純過ぎる。日本とウイグルではコンテキストが違う。清朝や中華民国の時代とは違って、ソフトな形をとってはいるが、政策的な流入により新疆の約半数の人口を漢人が占め、自治区の主なポストは漢人が握る状況では、民族のアイデンティティを漢人に対して対抗するような形で形成していくのは当然であろう。少しでも行き過ぎれば分離主義者として政府当局の取締りをうけるという、そのような状況を念頭におくべきである。

また、『十二のムカム』という有名なウイグルの伝統音楽があるが、最近ではこの音楽に対してのアラブやペルシャの影響を排除して、タリム盆地に栄えた仏教の伝統と結びつける学説がある。これによると最近では、ウイグルの歴史はタリム盆地内部で生じたものであり、外部とのつながりは無視される傾向にある。それは民族主義者と中国政府支持者の奇妙な共通点である。 29

このように言語は民族的アイデンティティの一つにしかすぎない。さらに言語は現在に焦点を持っており、過去の歴史とは違う次元で動くのである。

言語保存論は主に言語学者の勝手な言語至上観からきているもので、民族自身は言語の存続についてそれほど意識しているわけではない。また、言語経済論派によれば、人々の言語の選択は、民族語への忠誠心や民族意識よりも、はるかに経済的事情を考慮して決断される。言語意識の出現は近代社会における歴史的現象である。言語の交換というのはロマン民族主義的文献が主張するように断腸や痛恨の念を伴う取引ではない。民族の境界表示になう文化事象は、衣装にしる、宗教にしる、多かれ少なかれ日常生活とは異なる抽象的なシンボル性を帯びている。シンボル化した言語は強力な境界維持の手段となる。同化政策など強制的な境界操作などが行われると民族的な反発を引き起こす。 30

しかし、たてまえでは中国政府はウイグルに対して同化政策をとってない。でも、イスラムについては原理主義と民族運動との関連から、かなり制限が加えられている。その点で、イスラムが象徴性を帯びることはあるかもしれない。だが、民族語は教育でも使用されているから、一般の人にとってはウイグル語が衰退することなど想像もできないし、守るべき言葉としても思いもよらない。ウイグル語は今のところシンボル化していない。

アイデンティティは差異に関わる。それは個人でも集団でも民族でもそうである。

そして象徴的帰属と権力関係との相互作用によって構成される。ウイグルはその民族のアイデンティティに帰属し、漢民族は中華民族という国家アイデンティティを持ち出してくる。ウイグルにおける漢語バイリンガルを言語の政治学として捕らえるならば、それは言語の問題ではなくアイデンティティの問題である。そして、それは権力関係の問題でもある。言語的なマイノリティが漢語世界にウイグルを忘れて同化しても、根無し草になって、孤立してしまふ。しかし、多文化、多言語の方向に行こうとしても、漢語を国家統一の原理と考える政治的権力との対立、国家の統一を妨げる、漢語の優越が揺らぐ、多額の費用を必要とするなどの圧力を乗り越えねばならない。だから「言語政策の対立、あつれきはいつも言語少数派に政治的、社会的ディレンマを生じさせるのである。」 31

7. おわりに

文字はウイグル文化の中心にある。この文字に対するこだわりはアラビア文字を超えて突厥文字までさかのぼる。近代ウイグル語は混乱したが、結果として、コーランの文字として長く親しまれてきたアラビア文字で表記された。戦後、文字改革に抵抗した力はそこから出てきているのであろう。

このような民族がなぜ漢語に傾斜しようとしているのであろうか。単純に考えれば、ウイグルは現実としては中国の一部であり、言語政策や教育政策は中国政府に左右される。開放経済の中では漢人とのつきあいは欠かせない。漢語教育に先行して、漢語の社会的必要性が高くなっている。言語は文化資本であり、漢語を身につければ階層を上昇できるとすれば、その方向に行くかもしれない。漢人と対等に競争しようとするれば、手段としての漢語習得は必要であると考えている。

開放経済とともに、教育や言語も資本主義的な影響をまぬがれることはできない。「言語を教えることがひとつの就職口となっていくにつれて、それはたかさんの金がかかりはじめた。いまや言葉は国民総生産を構成する市場的価値の一つである。学校で、あるべき話し方を教えるために金が使われる。教えられた日常の言語というのは、産業化以前の文化にはなかったものである。このように近代社会は言語の資本化を進めていった。」 32

また新疆全土で統一された「国語」による教育はなされていなかった。過去から現在に至るまで、多民族、多言語の状況は変わらない。民族運動が興隆した東トル

キスタン共和国でさえ漢語使用を認めていた。今は民族識別によって、民族境界が明確に線引きされてしまったが、雑種的な多言語状況が消えてしまったわけではない。異言語に対する抵抗のなさは、異言語を習得する能力の高さでもある。しかし、今は中国文化の圧力の前に、六千年のタリム盆地でのウイグルの歴史の物語を創る事が始まっている。政治的経済的抵抗は無力かもしれないが、文化的抵抗は必要であり、効果的でもある。ウイグルの文化の政治学のみならずウイグル語の位置は今のところ非常にあいまいである。しかし将来的にウイグル語が政治的になり、シンボル化することはありうる。その時のため、言語を含めた「民族文化の歴史」の読み直しは必要であろう。文化は存在しているだけでなく、創造されるものでもある。先人の蓄積を前にして、それはすでに始められている。

{注}

- 1、Rudelson, J. J., 『Oasis Identities・Uyghur Nationalism Along China's Silk Road』、Columbia University Press, 1997, p. 128
- 2、アンダーソン、B. (白石隆・白石さや訳)、『想像の共同体』、リブレポート、一九八七、八十一―八十二頁。
- 3、小松久男、『革命の中央アジア』、東京大学出版会、一九九六、五十八頁。
- 4、同右書、一六九―一七〇頁。
- 5、Rudelson, op. cit., p. 162
- 6、大石真一郎、「カシュガルにおけるジャディード運動」『東洋學報』、第七十八卷、一一四頁。
- 7、白潤生『中国少数民族文字报刊史綱』中央民族大学出版社、一九九四、二十八―三十頁。
- 8、新免康、「グンナー・ヤーリング著、カシュガルからの印刷物」『東洋學報』、第七十五卷、一九九四、一六三―一六五頁。
- 9、プルジェヴァルスキー、N. M. (加藤九祚訳)、『黄河源流からロプ湖へ』、河出書房新社、一九七八、二九三頁。
- 10、Rudelson, op. cit., p. 56.
- 11、王柯、『東トルキスタン共和国研究』、東京大学出版会、一九九五、一三九頁。

- 12、 陆蔚、 「解放前后南疆农村的文化教育」 『南疆农村社会』、 新疆人民出版社、 一九九七、 一九六頁。
- 13、 間野英二、 『中央アジアの歴史』、 講談社、 一九七七、 三十九―四十一頁。
- 14、 羽田明・山田信夫・間野英二・小谷仲男、 『西域』、 河出書房新社、 一九八九、 三十三頁、 九十五頁、 二六一頁。
- 15、 間野、 前掲書、 一〇一―一〇二頁。
- 16、 岩佐昌章、 『中国の少数民族と言語』、 光生館、 一九八三、 二一〇頁。
- 17、 間野英二、 『内陸アジア』、 朝日新聞社、 一九九二、 六五頁。
- 18、 間野、 同右書、 一〇二頁。
- 19、 福田誠治、 『人間形成からみた比較文化』、 北樹出版、 一九九六、 一四二―一四七頁。
- 20、 ウイグルの文字改革については次の文献によっている。 Ildiko Beller-Hann, 「Script Change in Xinjiang」, S.Akiner(ed) 『Cultural Change and Continuity in Central Asia』, Kegan Paul, 1991.
- 21、 『新疆年鑑（一九九七）』、 新疆人民出版社、 一九九七、 九― 澆頁。
- 22、 Ping, Ji, 『Frontier Migration and Ethnic assimilation(Ph. D. dissertation)』, UMI, 1990, p. 183.
- 23、 『新疆年鑑（一九九四）』、 新疆人民出版社、 一九九四、 二九六頁。
- 24、 バリバル、 E.、 I.ウオーラーステイン(若森章孝他訳)、 『人種・国民・階級』、 大村書店、 一九九七、 一七六―一七七頁。
- 25、 庄司博史、 「民族境界としての言語」、 『岩波講座、 文化人類学』第5巻、 岩波書店、 一九九七、 八十二頁。
- 26、 バリバル、 前掲書、 一七九頁。
- 27、 Rudelson, op. cit., p. 157.
- 28、 アレン、 T. B.、 「シルクロードに眠る古代都市のミイラ」 『ナショナル・ジオグラフィック』、 第二巻、 第三号、 七十七頁。
- 29、 Light, N. 「Give and Take: Genealogies in Uyghur Music and Art」 『 1998 (インターネット) 』

30、庄司、前掲書、八十二―九十二頁。

31、Schmidt, R., 「The Politics of Identity」, 1997 (インターネット)。

32、イリイチ、H (玉野井芳郎・栗原彬訳)、『シヤドウ・ワーク』岩波書店、一九九八、一三〇頁。

要旨

ウイグルでは漢語教育が義務であり、特に開放経済以後は、漢語を習得することが生活のあらゆる側面で必要になっている。これはウイグル語衰退の危険性をはらんでいる。言語に限らず、政治や経済など漢文化の浸透が激しくなっているとき、ウイグルでもその民族の文化のアイデンティティを確立するため、文化の次元で戦いが始まっている。だが、言語は道具的側面を持つため、民族性とは異なるレベルで動く。ウイグル語の将来は気になる所である。